

ベネッセ教育総合研究所が東京大学社会科学研究所と共同で実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査」によると、一日の中で読書を「しない」(0分)と答えた小中高生は五二・七%に達し、半数を超えました。本調査は小中高生とその保護者を対象に行なわれ、二〇二四年度は約一万二千組から回答を得ています。

二〇一五年の調査では「読書をしない」と答えた小中高生は三四・三%であり、この十年間で約一・五倍に増加しました。さらに、調査結果からは、一日あたりのスマートフォン使用時間が長いほど読書時間が短くなる傾向も明らかになっています。

加えて、総務省の令和六年通信利用動向調査によると、スマートフォンの個人保有率は八〇・五%に達し、年々増加しています。このことから、小中高生のみならず、あらゆる世代で読書の時間が今後さらに減少していくことが予想されます。

また、英語辞典などで知られるオックスフォード大学出版局が二〇二四年版の「今年の言葉」に選んだのは「BrainRot」でした。この言葉は「取るに足らないオンラインコンテンツを過剰に視聴することで、精神的または知的水準が悪化した状態」を意味します。

近年、一五秒から一分程度で視聴できる「ショート動画」が急速に普及し、SNSや動画共有サイトで頻繁に利用されるようになりました。スキマ時間に気軽に最後まで視聴できるうえ、視聴者の興味に合わせ



主体性を育む 読書力を身に着けよう

て動画が自動的に次々と再生されるアルゴリズムが採用されているため、飽きることなくコンテンツを楽しめるといいます。

しかし、何も考えずに閲覧していると、あっという間に時間が過ぎ、当初の目的から離れてしまうことがあります。気づけば頭がぼんやりする、そんな経験をした人も多いのではないのでしょうか。先述の「BrainRot」を直訳すると「脳腐れ」ですが、まさにその言葉通りの状態に陥ってしまいます。学習院大学教授の秋田喜代美氏は、「まとまった文章を読むことは、思考力を培い、想像力を育み、さまざまな未知の世界への窓を開く契機になる」と述べています。

一方、スマートフォンの普及により、電子書籍という形で書店に足を運ばなくても手軽に本を読めるようになりました。さらに、プロのナレーターや声優による朗読を収録した「オーディオブック」も多くの作品が配信されており、本を読む時間がない人でも、移動中や作業中に本の内容に触れられるようになっていきます。

人工知能の開発は日々めざましく進んでおり、今後はますますスマートフォンを手放せない生活になるでしょう。

しかし、手持ち無沙汰にスマートフォンの「使われる」のではなく、デジタル機器の恩恵を十分に活用し、目的をもって主体的に「使って」いきたいものです。目まぐるしい毎日だからこそ、様々な形で読書の時間を確保し、まとまった文章に触れることで、自ら考える力を培っていきましょう。